

格助詞ガの意味構造についての認知言語学的考察

【キーワード】 格助詞、ガ、多義語、意味構造、認知言語学

森 山 新

1. はじめに

格助詞ガは (1)、(2) のように動作主体を表すことが多いが、(3)、(4) のように動作対象を表すこともある¹。

- (1) 太郎が次郎を殴った。
- (2) 太郎が二階の窓を開けた。
- (3) 次郎が太郎に殴られた。
- (4) 二階の窓が開いた。

また他動詞文では、動作主体だけでなく、(5)～(7) のように経験や変化、さらには存在の主体を表すこともある。

- (5) 太郎がその場面を見た。
- (6) 雨が降る。
- (7) あそこに鈴木さんがいる。

さらに、知覚、所有、感情などの経験を表す文では、(8) のように経験主体だけでなく、(9) のように経験対象を表すこともある。

- (8) 太郎が富士山を見た。
- (9) 太郎には富士山が見えた。

このように格助詞ガは様々な意味を持っている。認知言語学では意味と形式の対応関係を重視する立場から、ガという形式を共有しているこれらの用法は、何らかの意味（スキーマ的意味）を共有しつつ、プロトタイプを中心にして一つのネットワークをなすと考えている。ここでプロトタイプとは、あるカテゴリの中で、より中心的で、そのカテゴリを代表すると思われる成員をいう。またスキーマとは、カテゴリの全成員が共有する非常に抽象的な規定である。

本稿は認知言語学（とりわけ Langacker 1991 a, 1991 b）の格標識に対する考え方を日本語に応用し、格助詞ガに対する先行研究の菅井（2002）や、格助詞ニの意味構造を研究した森山（2004 a, 2004 b）などを参考にしながら、格助詞ガの意味構造について明らかにすることを目的とする²。

2. 先行研究

2.1. Langacker (1991 a, 1991 b) の格標識に対する考え

まず、言語化に際して格の決定がどのようになされるかについての認知言語学的な考えを整理してみたい³。Langacker (1991 a, 1991 b) によれば、認知主体としての人間は、図 1 (a) のように人間をとりまく外的世界を様々なモノと関係のネットワークで構成されていると見る。しかし人間は普通、(b)、(c) の

ように、その中の1つの動力連鎖 (action chain) に関心を向け、その一部を切り取り (scope)、叙述の対象とし、(d)のようにそれをベース (base)⁴として2つの参与者とその関係をプロフィール (profile)⁵する (1つの参与者がプロフィールされることもあるが、その場合には他動的な動力連鎖ではなく、自動的な動力連鎖となる)。

このようにプロフィールされた2つの参与者と関係により、プロトタイプ的な他動性や主格、対格といったものが規定される。プロトタイプ的な他動性とは、「(動作主体から動作対象への) エネルギーの授受関係」である。またプロトタイプ的な主格とは「他動的な事態における動作主体 (AG) を表す格」であり、プロトタイプ的な対格は「他動的な事態における動作対象 (PAT) を表す格」である (図2 <a> 参照)。例えば (10 a)、(10 b) が他動性及び主格、対格のプロトタイプである。(10 c)、(10 d) は移動主体 (MVR) が対格となる場合でプロトタイプの対格に近い用法である。

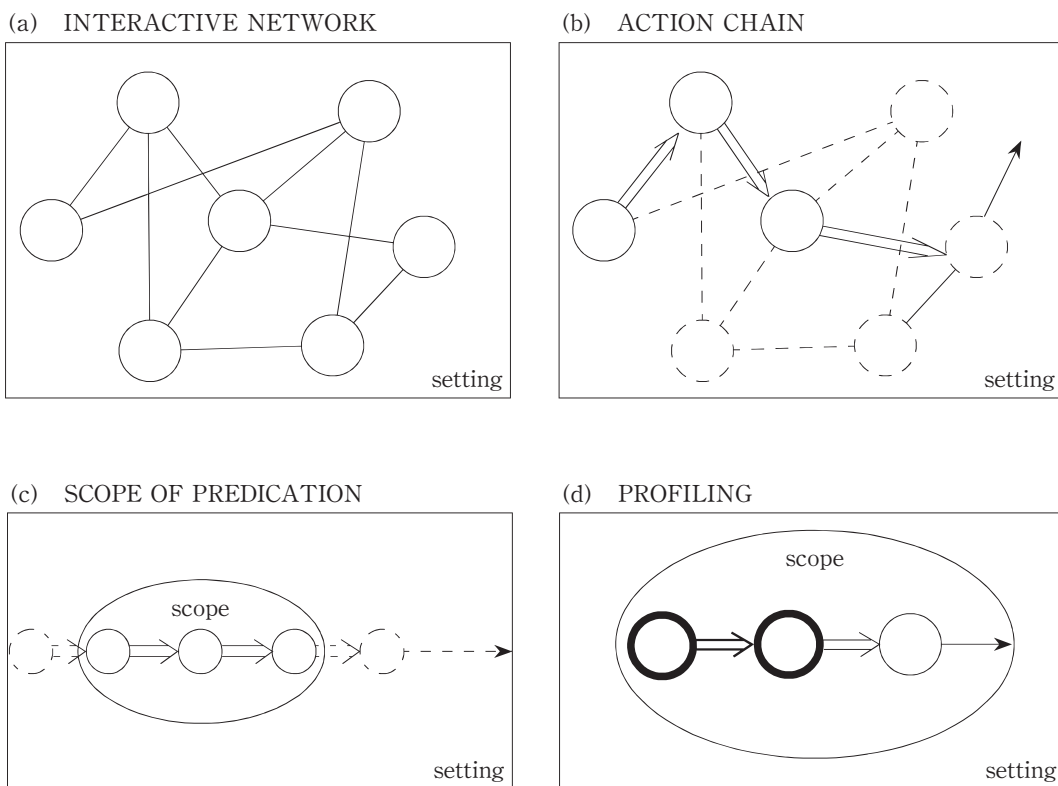


図1 人間の外界認知のプロセス (Langacker 1991 b : 215)

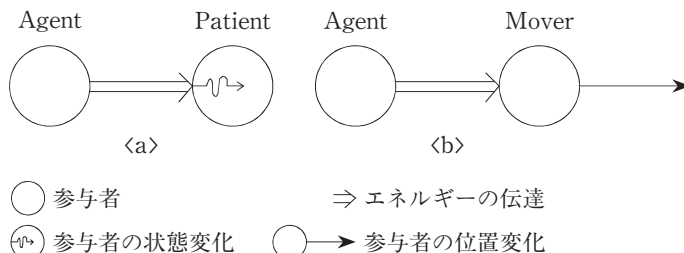


図2 他動的な事態のプロトタイプと主格・対格 (河上 1996 : 118)

- (10) a. John broke the window.
 b. Mary melted the ice.
 c. John drove the car.
 d. Mary opened the window.

しかし他動詞により表される事態が全てこのプロトタイプに合致するわけではない。以下の(11)、図3のような知覚経験や(12)のような対称的關係では順次他動性が薄れ、プロトタイプからの拡張とみなされる。

- (11) a. John saw a strange man.
 b. Mary heard the news.
 (12) a. Hilda resembles Marsha.
 b. Line A intersects line B.

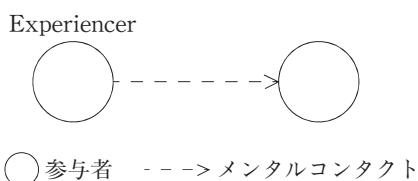


図3 知覚経験の事態 (河上 1996 : 120)

このように他動性にはプロトタイプ的なもの (break, hit など) を中心としたネットワーク構造が見られ、知覚経験 (see, hear など)、対称的關係 (resemble, intersect など) などの拡張例 (非プロトタイプ) では順次他動性が薄れていき、それに伴って動作主体 (AG) や動作対象 (PAT) という主格、対格のプロトタイプ的特性はスキーマ化していく。その結果、主格、対格全てが共有するスキーマ的特性とは、「2つの参与者間の何らかの非対称的關係において第一の際立ちが与えられた参与者 (TR : trajector) を表す格が主格、第二の際立ちが与えられた参与者 (LM : landmark) を表す格が対格」といった抽象的なものとなるとしている。他動性、主格、対格の概念をまとめると以下ようになる。

(13) 他動性

プロトタイプ：動作主体と動作対象から成立するエネルギー授受関係

スキーマ：2つの参与者間にある何らかの非対称的關係

(14) 主格

プロトタイプ：動作主体を表す格、プロファイルされた非対称的關係の先頭

スキーマ：第一の際立ち (TR) を与えられた参与者を表す格

(15) 対格

プロトタイプ：動作対象を表す格、プロファイルされた非対称的關係の末尾

スキーマ：第二の際立ち (LM) を与えられた参与者を表す格

以上が無標の場合であるが、有標の場合には、認知主体の何らかの動機づけで、本来の TR より下位にある参与者 (例えば動作対象) をより際立ったものとして解釈する場合がある。図4は(16)の4つの文の把握の仕方を図式化したものである。図で太線はプロファイルされた部分、細線はプロファイルされていない部分、破線はスコープからも外れた部分である。また S は主格で表された主語、O は対格で表された目的語を意味する。

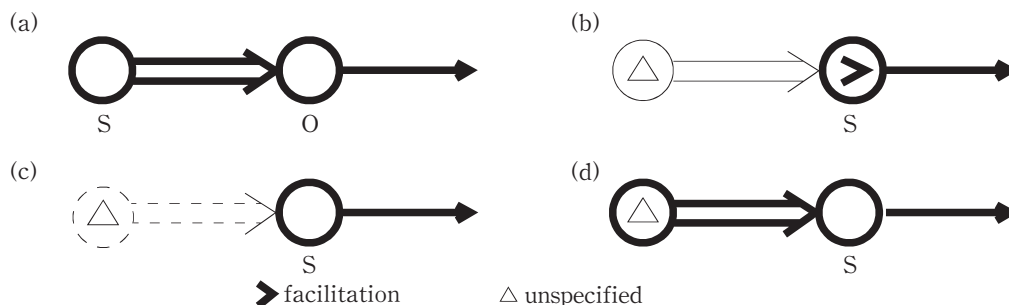


図4 (16) の把握の図式化 (Langacker 1991 a : 335)

- (16) a. He opened the door.
 b. The door opened very easily.
 c. The door suddenly opened.
 d. The door was opened.

(16 a) が無標の把握である他動詞文で、動作主体が TR となり主格で表されている。これに対し (16 b) の中間構文、(16 c) の能格自動詞文ではプロファイルが移動、限定され、動作主体はプロファイルから外れ、動作対象がプロファイルされた唯一の参与者 (TR) となり主格で表されている。(16 b) と (16 c) の違いは、程度の問題であるが (16 b) では “very easily” に動作主体の影響を見ることができることから動作主体がスコープ内に残っている点が (16 c) とは異なっている。(16 d) の他動詞受動文は動作主体が明示されていないが、(16 a) と同じように動力連鎖全体がプロファイルされ、それが動作主体の存在を前提とした「受動態」という表現になっている。しかしながら (16 b) や (16 c) 同様、認知主体が動作対象をより際立ちのあるもの (TR) として解釈し、主格で表している点が (16 a) と異なっている。主格の意味役割も (16 a) では動作主体であるのに対し、(16 b) ~ (16 d) では動作対象である。しかしこれらの場合にも「第一の際立ち (TR) を与えられた参与者を表す格」といった主格のスキーマは共有されている。つまり (16 b) ~ (16 d) は認知主体の何らかの動機づけが反映した有標的な把握で、プロトタイプ (無標) である (16 a) から派生した拡張例であると解釈できる。

2.2. 格助詞ガに対する菅井 (2002) の研究

菅井 (2002) では、格助詞ガの両義性に着目し、それらは同一のスキーマを共有すると同時に、それぞれが相異なる 2 種類の構文スキーマを持っていることを説明している。格助詞ガの基本的意味の「主体」と「対象」とは (17) (18) のようなものである。

- (17) 太郎が走る。
 (18) 水がほしい。

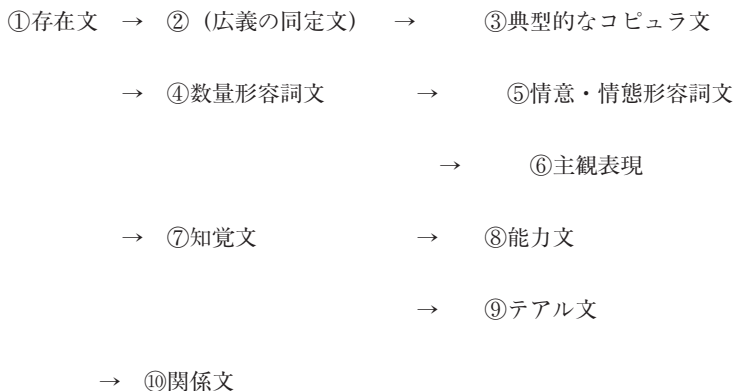
2 種類の構文スキーマとは、「過程的構文」と「存在論的構文」であり、(17) が前者、(18) が後者のスキーマを有している。

「過程的構文」とは、「存在を前提とした上で参与項の関係や叙述的な展開を志向する構文」で、(17) のように述部内に「主体」(と「対象」) を有し、そのうち「主体」がガ格で表される。

一方「存在論的構文」とは、「存在のあり方を志向し、構文において直接的に反映させる構文」で、(18) のように述部内には「主体」がなく、「対象」のみが存在するため、これがガ格で表される。

またこれら 2 つの構文におけるガ格が共有するスキーマとは「述部内において最も顕著な成分」である。従って「過程的構文」とは、「述部内において最も顕著な成分を実現するスロットが「主体」に充てられている構文」であり、「存在論的構文」とは、「述部内において最も顕著な成分を実現するスロットが「対象」に充てられている構文」であるという。

また菅井 (2002) では後半において、「存在論的構文」の範疇化を試みている。それによれば、この構文は図 5 に示したように「存在文」をプロトタイプとした放射状カテゴリーを形成しているとしている。「→」は拡張関係を表し、矢印で結ばれた距離はプロトタイプである存在文との距離的な近さを示している。したがって右にある用法ほど、本来の存在論的構文からは外れ、逆に「過程的構文」に近づいていくという。



- ①存在文：地震の被害は今後も拡大する危険性がある。
- ②同定文：これが私の任務だ。
- ③典型的なコピュラ文：伊藤博文が初代の総理大臣である。
- ④数量形容詞文：本当に苦勞が多いんですね。
- ⑤情意形容詞文：貴方の元気な姿が何より嬉しいです。
情態形容詞文：その日は特に夕日が赤かった。
- ⑥主観表現：僕はずっとこのクラブがほしかったんです。
- ⑦知覚表現：貴方には向こうの白いビルが見えますか。
- ⑧能力文：わたしの言葉が分かりますか。
- ⑨テアル文：テーブルの上に花瓶が置いてある。
- ⑩関係文：行政改革には相当の時間と労力がかかるでしょう。

図 5 ガの存在論的構文の放射状カテゴリー (菅井 2002)

2.3. 格助詞ニの意味構造に対する森山(2004 a, 2004 b)の研究

格助詞ニには様々な意味用法があるが、認知主体である人間はニの使用に際し、①事態をプロセスとして動的に把握するか(プロセス的把握)、または②非プロセスとして静的、存在論的に把握するか(非プロセス的、存在論的把握)のいずれかを選択している(図 6 参照)。①ではニ格は「ガ格と動的に対峙する参与者」というスキーマを共有し、②では「ガ格と静的に対峙する参与者」という前者とは異なったスキーマを共有しつつ、それぞれのプロトタイプを中心に別個のネットワーク構造を形成している。しかし日本語の場合、両者は同じニという格標識で表示されていることから、超スキーマを共有し、一つのカテゴリー

としてのまとまりをなしていると考えられる。その超スキーマとは「ガ格からの動力連鎖に対し独立性、主体性を持ってガ格に対峙する性質（対峙性）」である。

これらはまた、認知主体の見え（perspective）との関わりの弱い「客観的把握」と、認知主体の見えが色濃く反映した「主観的把握」という把握の仕方が関与している。「プロセス的把握」では「移動の着点」用法がより「客観的把握」、「移動の起点」用法がより「主観的把握」である。一方「非プロセス的把握」では「存在の位置関係」用法がより「客観的把握」であり、「経験の主体」用法がより「主観的把握」である。「主観的把握」の場合には、意志を有する「人（有情物）」などがニ格になりやすく、ガ格に対し「能動性」が発揮され、起点としての意味を持つようになる。以上をまとめたものが図6、表1である。

図6より明らかだが、①「移動の着点」用法では（1-a）が、②「移動の起点」用法では（2-a）、③「存在の位置関係」用法では（3-a）、④「経験の主体」用法では（4-a）がプロトタイプ的な用法である。従って①、②では順次右または下へ行くにつれて「具体的→抽象的→メタファー的」、「人→モノ→場所」などといったように拡張的用法となっている。

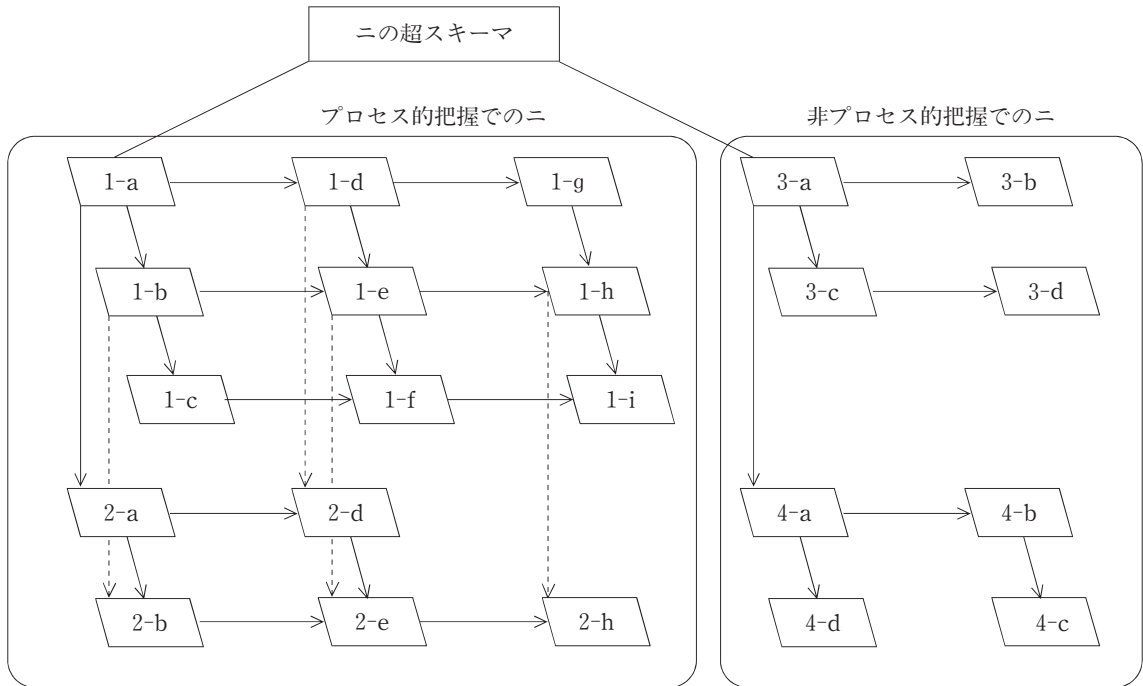


図6 格助詞ニの意味構造

注) 図中の用法の番号は以下の例文に対応している。矢印は拡張関係を示す。

表1 ニ格の意味用法のまとめ

意味用法	把握の主観性	把握のプロセス性とニ格の意味		ガ格に対するニ格の特徴
移動の着点	客観的把握	プロセス的（動的）	着点	対峙性
移動の起点	主観的把握	プロセス的（動的）	起点	対峙性、能動性
存在の位置関係	客観的把握	非プロセス的（静的）	（着点）	対峙性
経験の主体	主観的把握	非プロセス的（静的）	（起点）	対峙性、能動性

①移動の着点

- (1-a) 人への具体的移動 「友だちに本をあげる。」「社長に会う。」
- (1-b) 人への抽象的移動 「学生に日本語を教える。」「母に甘える。」
- (1-c) 人へのメタファー的移動 「一人前の大人にする／なる。」
- (1-d) モノへの具体的移動 「携帯にストラップをつける。」「醤油がこぼれて服にしみがついた。」
- (1-e) モノへの抽象的移動 「ゲームボーイにはまる。」「政府は行政改革に取り組んでいる。」
- (1-f) モノへのメタファー的移動 「水を氷にする。」「水が氷になる。」
- (1-g) 場所への具体的移動 「机の上に本を載せる。」「映画（を見）に行く。」
- (1-h) 場所への抽象的移動 「遠くアメリカに思いを馳せる。」「ようやく日本に慣れてきた。」
- (1-i) 場所へのメタファー的移動 「都を京都にする／なる。」

②移動の起点

- (2-a) 人からの具体的移動 「友達に本をもらう。」「岡田氏は犯人に殺された。」
- (2-b) 人からの抽象的移動 「先生に日本語を教わる。」「彼は国民に愛されている。」
- (2-d) モノからの具体的移動 「銃弾に死す。」「台風の家を飛ばされる。」
- (2-e) モノからの抽象的移動 「借金に苦しんでいる。」「騒音に悩まされている。」
- (2-h) 場所からの抽象的移動 「彼は大都会に染まっていった。」

③存在の位置関係

- (3-a) 空間的位置 「机の上に本がある／ない。」
- (3-b) 時間的位置 「彼は 10 時に寝る。」
- (3-c) 空間的位置の LM 「わが家は学校に近い。」
- (3-d) ある座標上の LM 「この素材は熱に強い。」

④経験の主体

- (4-a) 所有主 「私に子供がある／いる。」
- (4-b) 知覚主 「私には富士山が見える。」
- (4-c) 能力主 「姉にバイオリンが弾ける。」
- (4-d) 感情主 「私にはそのことがとてもうれしかった。」

3. 格助詞ガの意味構造分析

上述したように、本稿は認知言語学の考え方を日本語に応用し、菅井 (2002) の格助詞ガの先行研究や、森山 (2004 a, 2004 b) の格助詞ニの研究を参考にしながら、格助詞ガの意味構造について明らかにすることを目的としている。まずは森山 (2004 a, 2004 b) の格助詞ニに対応する形で、①プロセス的主体、②プロセス的対象、③非プロセス的主体、④非プロセス的対象という 4 つのカテゴリーを設定してみる⁷。

また図 7 はそれを図式化したものである。カテゴリーの名称から明らかだが、①、②がプロセス的把握での用法であり、③、④が非プロセス的、存在論的把握での用法である⁸。それぞれについて詳述する。

3.1. プロセス的主体

これは事態に対し、「プロセス的」かつ「客観的」な把握をした場合、すなわちプロセス的な事態を客観的に把握した場合である。意味役割としては、図 8 の (1-a) のような物理的、具体的な「動作主体」がブ

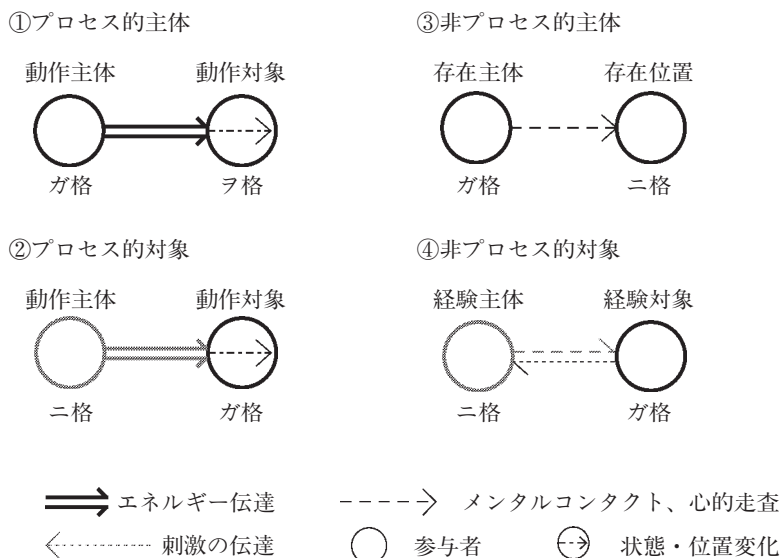


図7 格助詞ガの4つの用法（但し①は他動的动作の場合を示している）

ロタイプであるが、他動性の抽象化とともに、(1-b) のような抽象的な「動作主体」、さらに (1-c) のような知覚や感情などの「経験主体」が拡張的用法として存在する。なお図8で、(1-a) の実線の二重矢印は物理的、具体的な動力連鎖、(1-b) の点線の二重矢印は抽象的な動力連鎖、(1-c) の点線の双方向の矢印は、経験などに伴う双方向のやり取りを示している。感情、知覚などの経験的営みは、人間が主体となって初めて成立するものであるが、主体（人）から対象への働きかけだけではなく、対象から主体へも何らかの刺激の伝達が存在し、双方向のやり取りが存在しているため、ここでは双方向の矢印で示してある（影山 2001）。また「動作主体」は人がプロトタイプであるが、拡張的用法としてモノが「動作主体」となった場合には、「因果主体」と言えるようなものに拡張していく。

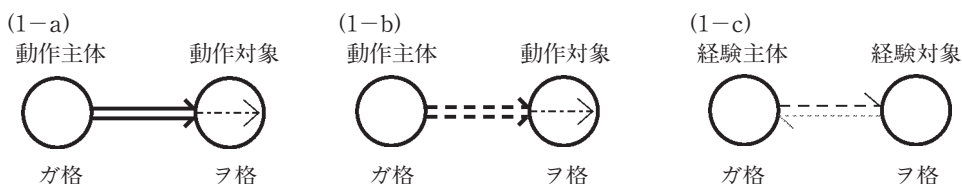


図8 他動性の抽象化と「プロセスの主体」用法の拡張

「プロセスの主体」用法は、「他動的事態」ばかりではなく、「自動的事態」も存在する。やはり「動作主体」がプロトタイプとなる。自動的な「動作主体」とは、後述 (1-d) の「彼が社長に会う。」、「女の子が泣く。」、(1-e) の「娘が母に甘える。」のように意図的、生理的な動作を表す非能格動詞や、(1-d) の「雨が降る。」のような自然発生的な状態変化を表す非対格動詞で表された能動的、自発的な事態の主体をさす⁹。但し前述した (16b) ~ (16d) のように、本来は「他動的な動作対象」でありながら、スコープやプロフィールの移動により、「自動的な動作主体」のように把握した場合は除く（これは「プロセスの対象」用法に属し、次節で取り扱う）。

「プロセスの主体」用法では Langacker が言うように、「動作主体」など、プロフィールされた動力連鎖の先端に最大の際立ちが与えられ (TR)、主格となる。いずれの場合にもガ格は能動性や自発性を持ち、

そのため自然発生的な事態を除き、人（有情物）である場合が多い。

以上のように「プロセス的主体」用法とは、物理的、具体的な動力連鎖において人を「動作主体」とした場合をプロトタイプとし、他動性の抽象化や、人のモノ化に従って、「経験主体」や「因果主体」などの拡張的用法が存在している。

(1-a) 具体的他動的動作

太郎が次郎を殴った。（動作主体：人）

太郎が二階の窓を開けた。（動作主体：人）

突風が傘を吹き飛ばした。（因果主体：モノ）

(1-b) 抽象的他動的動作

彼が学生に日本語を教える。（動作主体：人）

その問題がみんなを悩ます。（因果主体：モノ）

(1-c) 経験的他動的動作

私は（が）その事件を悲しく思う。（経験主体：人）

私は（が）その場面を見た。（経験主体：人）

(1-d) 具体的自動的動作

彼が社長に会う。（動作主体：人）

女の子が泣く。（動作主体：人）

雨が降る。（自然発生的な状態変化主体：モノ）

(1-e) 抽象的自動的動作

娘が母に甘える。（動作主体：人）

(1-f) 経験的自動的動作

花子はその問題に気づいた。（経験主体：人）

3.2. プロセスの対象

これは事態に対し、「プロセス的」かつ「主観的」な把握をした場合、すなわち**事態をプロセスとして把握するが、把握に認知主体の主観が反映した場合**である。前述した(16 a)のように、プロセス的な事態を客観的に把握した場合には、プロファイルされた動力連鎖の先端（プロトタイプとしては動作主体）に最大の際立ちが与えられ（TR）、主格となるが、(16 b)～(16 d)のように認知主体の何らかの動機づけにより、プロファイルやスコープ、最大の際立ち（TR）が移動すると、動力連鎖のより下流にある参与者（例えば本来第二の際立ち（LM）の与えられていた「動作対象」）に最大の際立ちが与えられ（TR）、主格となる場合がある。これが「プロセスの対象」の用法である。具体的には(16 b)がプロファイルの移動、(16 c)がスコープの移動、(16 d)が最大の際立ち（TR）が移動した場合である（図9で「動作主体」や「経験主体」及びそれらを起点とする動力連鎖が薄色で書かれているが、これは脱焦点化により最大の際立ちが「動作対象」や「経験対象」に移ったことを示している）。この用法は、動力連鎖の「対象」的な意味役割を持ったものが主格で表されたものであるため、前節の「プロセス的主体」用法のうち、他動的動作の用法が主観的に把握されたものに限られる。従って後述(2-a)のように動作の他動性が具体的、物理的な「動作対象」がプロトタイプとなるが、他動性の抽象化とともに、(2-b)のような抽象的な「動作対象」、さらに(2-c)のような知覚や感情などの「経験対象」が拡張的用法として存在する（図9参照）。また他

動的プロセスの主体がモノである場合には「動作対象」は「因果対象」となる¹⁰。

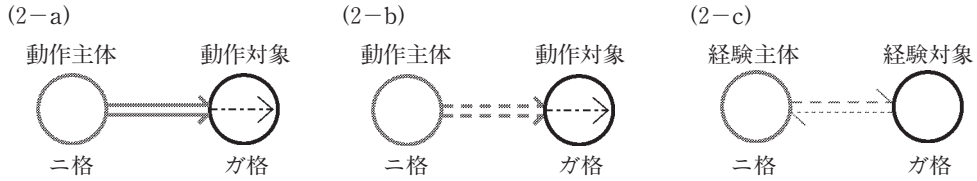


図9 他動性の抽象化と「プロセス的対象」用法の拡張

「プロセス的対象」用法には、(16 d) のように事態を「受動的な事態」として把握し、受動文で表現する場合と、(16 b)、(16 c) のように「自動的な事態」として把握し自動詞文で表現する場合とがある¹¹。「動作主体」などのプロセスの主体は、「受動的な事態」の把握では TR ではないもののいまだプロフィール内に残っているが、「自動的な事態」の把握では、プロフィールから外れている。このようなことから本来最大の際立ちが与えられ、主格となるべきであった「動作主体」などの参加者は、事態を「受動的な事態」として把握する場合には、日本語の場合ニ、ニヨッテ、カラなどで表されるが、「自動的な事態」として把握する場合には、明示されないのが普通である。但し前節でも述べたが、「自動的な事態」として把握する場合とは、(2-c) や (2-d) のように、認知主体の何らかの動機づけにより、本来は「他動的な事態」であるものを、スコープやプロフィールの移動により「自動的な事態」として把握した場合をさし、(1-d)、(1-e) のように元々から能動的、自発的な事態は「プロセス的主体」用法に属する。

以上のように「プロセス的対象」用法は、物理的、具体的な「動作対象」がプロトタイプであるが、動力連鎖の抽象化により、抽象的な「動作対象」や、感情、知覚などの「経験対象」などが拡張的用法として存在している。またモノを主体とする動力連鎖の「因果対象」も動作主体のモノ化による拡張的用法である。さらに (2-f) のように、一部の「動作対象」は本来「プロセス的」事態でありながら相当に「非プロセス的、存在論的」に把握された表現がある。影山 (2001) が「脱使役化」と呼んでいるものがそれにあたるが、これらは動作主体が存在しながらそれを自動的事態として表したものである。動作主体やその動作がスコープや焦点から外れるのは、3.4 節で述べる経験的事態同様、認知主体 (話者) の視点から事態を主観的に把握しているからである。なお (2-f) のうち「私は (が) あの先生に日本語を教わった。」の「教わる」は他動詞であるが、元の他動詞「教える」からの「脱使役化」により、動作主体 (あの先生) が脱焦点化されニ格で表されているため、自動 (詞) 的である。「脱使役化」動詞と呼ばれているものには「かかる」のタイプとして「決まる」「植わる」「儲かる」など、「教わる」のタイプとしては「授かる」「預かる」などがある (影山 2001: 31-32)。そのような意味から (2-f) は「プロセス的把握」でありながらも「非プロセス的、存在論的把握」に近い。

最後に「プロセス的対象」用法を前節の「プロセス的主体」用法との関連で言えば、「プロセス的対象」用法は、本来他動的で能動的な事態を、認知主体の何らかの動機づけにより、自動的、または受動的なものとして把握したわけであるから、「プロセス的主体」用法から派生した拡張的用法であると考えることができる¹²。

(2-a) 具体的受動的動作

- 彼が友達に本をもらう。(動作対象)
- 岡田氏が犯人に殺された。(動作対象)
- 傘が突風に吹き飛ばされた。(因果対象)

(2-b) 抽象的受動的動作

金さんは (が) あの先生に日本語を教えられた。(動作対象)

日本と韓国でワールドカップが開かれた。(動作対象)

みんながその問題に悩まされる。(因果対象)

(2-c) 経験的動作

彼は (が) 彼女に好かれている。(経験対象)

(2-d) 具体的自動的動作

皿が割れる。(動作対象)

(2-e) 抽象的自動的動作

授業が始まる。(動作対象)

(2-f) 非プロセス的、存在論的把握に近い自動的動作

壁に絵がかかっている。(動作対象)

私は (が) あの先生に日本語を教わった。(動作対象)

3.3. 非プロセス的主体

これは事態を「非プロセス的 (存在論的)」かつ「客観的」に把握した場合、すなわち**非プロセス的、存在論的な事態を客観的に把握した場合**である。これには以下のように、いわゆる存在文で表される「存在主体」のほか、形容文 (数量形容文、性状形容分など) で表される「形容主体」、同定文で表される「同定主体」などが含まれる。形容文や同定文は存在文から派生した拡張的な用法であろう¹³。

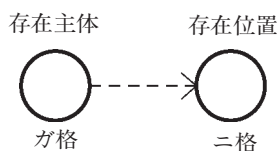


図 10 非プロセス的主体用法

(3-a) 机の上に本がある/ない。(存在主体)

(3-b) あの家 (に) は家族が多い。(数量形容主体)

(3-c) その日は夕日が赤かった。(性状形容主体)

(3-d) 彼は (が) 学生である。(同定主体)

3.4. 非プロセスの対象

これは事態に対し、「非プロセス的 (存在論的)」かつ「主観的」な把握をした場合で、**本来はプロセス的な事態を、認知主体の主観を反映させ、非プロセス的、存在論的に把握した場合**である。これには所有、知覚、能力、感情などの「経験対象」の用法がある。日本語で「経験主体」を明示する場合には、ニ格で表すのが普通である。

図 11 は「見る」という知覚的な事態を例に、プロセス的把握の「経験対象」用法 (②「プロセスの対象」に属する) と、非プロセス的、存在論的把握の「経験対象」用法 (④「非プロセスの対象」に属する) とを比較したものである。前者では「N が P ニ見ラレル」といった他動詞の受動文で表され、後者では「N が P ニ見エル」といった自動詞文で表される。図 11 を見ると、図左のプロセス的把握では、認知主体の何

らかの動機づけにより、最大の際立ち (TR) が「経験主体」から「経験対象」へと移動していることがわかる。

一方図右の非プロセス的、存在論的把握は、プロトタイプとしては「経験主体」に認知主体 (話者) の視点を置いた主観的把握となり、その結果「経験対象」が非プロセス的、存在論的に把握される。そのため経験 (知覚) 者自身である「経験主体」や、経験 (知覚) 者自身の動作である「経験主体から経験対象への働きかけ」はスコープから外れ (図右では薄色で表示した)、スコープ内には「経験対象」と「経験対象からの刺激」のみが残り、「経験対象」は最大の際立ち (TR) を持った参与者としてガ格で表される。これを「非プロセス的、存在論的」と言うのは、「経験対象」がプロセス的な動作の対象としてではなく、経験主体の「知覚ドメイン」における「存在」として非プロセス的に把握されるからである。

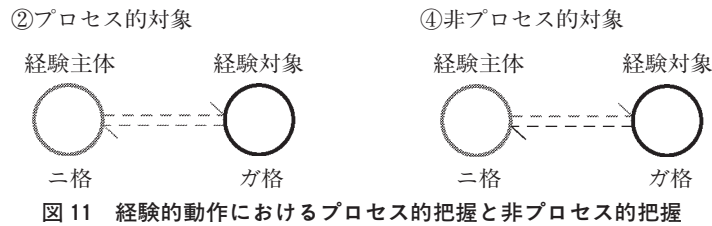


図 11 経験的動作におけるプロセス的把握と非プロセス的把握

経験的事態を詳細に見ていくと、(4-a) は (3-a) と同じ動詞「ある／いる」が用いられている。このことから、(4-a) は (3-a) からの拡張と考えられる。(3-a) は客観的に実在する空間における存在を示しているが、この客観的な空間ドメインが主観化し、ニ格で表された人 (所有主体) の「所有ドメイン」における存在を示している。

(4-b) は空間ドメインの主観化がさらに進行し、「知覚ドメイン」における存在を示している。知覚ドメインにおけるプロトタイプはなんといっても「視覚ドメイン」で、「私には富士山が見える。」とは私 (認知主体) の视界に富士山が「ある」ことに他ならない。その他の知覚ドメインも同じように考えられる。

(4-c) になると、知覚ドメインはより抽象的な「能力のドメイン」に拡張する。知覚とは「見える」「聞こえる」「匂う」「感じる」など人間が感覚をもって行う基本的な能力であるが、これがより広範な能力へと拡張されたものが (4-c) である。これも、「弾ける」「読める」などの様々な能力がそれぞれの特定化された能力のドメインにおける存在としてとらえられたものであると考えられる。

(4-d) は「感情のドメイン」における存在を示したもので、感情は知覚と共に人間の基本的な能力であることから、(4-b) 同様 (4-a) から拡張したものであると思われる¹⁴。

- (4-a) 私に子供がある。(所有対象)
- (4-b) 私には富士山が見える。(知覚対象)
- (4-c) 姉にバイオリンが弾ける。(能力対象)
- (4-d) 私にはそのことがとてもうれしかった。(感情対象)

3.5. 格助詞ガの超スキーマ

以上をまとめたものが表 2、図 12 である。格助詞ガは、格助詞ニと同様に、「プロセス性」、「客観性」という 2 つの把握の仕方によって①プロセス的主体、②プロセス的対象、③非プロセス的主体、④非プロセス的対象という 4 つの用法があることがわかった。これらのうち①と②は「プロセス的把握における動的な参与者としての用法」、③と④は「非プロセス的、存在論的把握における静的な参与者としての用法」

表 2 ガ格の意味用法のまとめ

意味用法	把握の主観性	把握のプロセス性とガ格の意味	
プロセス的の主体	客観的把握	プロセス的 (動的)	主体的
プロセス的の対象	主観的把握	プロセス的 (動的)	対象的
非プロセス的の主体	客観的把握	非プロセス的 (静的)	主体的
非プロセス的の対象	主観的把握	非プロセス的 (静的)	対象的

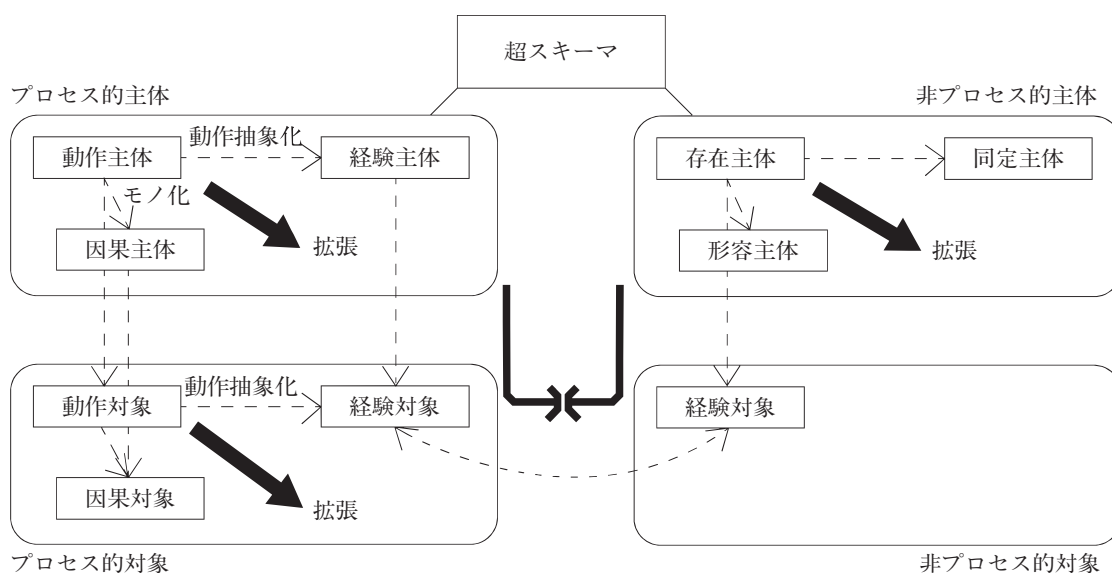


図 12 ガ格の意味のネットワーク構造

と、2通りの異なる用法にまとめられる。また①「プロセス的の主体」や③「非プロセス的の主体」は「主体」としての用法であり、②「プロセス的の対象」や④「非プロセス的の対象」は「対象」としての用法である¹⁵。また②「プロセス的の対象」用法は①「プロセス的の主体」用法から、④「非プロセス的の対象」用法は③「非プロセス的の主体」用法から、認知主体の動機づけが加わること（主観的把握）により派生した拡張の用法である。

このように格助詞ガは意味の異なる4つの用法があるが、それらが同じマーカー「ガ」で表されていることを考えると、認知言語学が重視する Bolinger (1977) の「意味と形式の一対一対応」の原則から考えて、何らかの共通のスキーマ（超スキーマ）を仮定しなければならなくなる。菅井 (2002) ではこれを「述部内において最も顕著な成分」であるとした。これは本稿の言葉で言えば「表現の対象としてスコープされた部分で、最大の際立ちを与えられた参与者（TR）を表す格」と表すことができる。

4. まとめ

格助詞ガの意味構造についてみてきた。まとめると以下のようになる。

- ① 格助詞ガはニと同様、「プロセス的把握における動的な参与者としての用法」と「非プロセス的、存在論的把握における静的な参与者としての用法」という2通りの用法がある。
- ② ガの「プロセス的把握における動的な参与者としての用法」には、事態をより客観的に把握した「非

プロセス的主体」の用法と、事態をより主観的に把握した「プロセス的対象」の用法とがある。「非プロセス的、存在論的把握における静的な参与者としての用法」も同様に、事態をより客観的に把握した「非プロセス的主体」の用法と、事態をより主観的に把握した「非プロセス的対象」の用法がある。それぞれにおいて後者（主観的把握）は、認知主体の何らかの動機づけにより前者（客観的把握）から派生した拡張的用法である。

- ③ ガの「プロセス的把握における動的な参与者としての用法」と「非プロセス的、存在論的把握における静的な参与者としての用法」とは、「表現の対象としてスコープされた部分の中で、最大の際立ちを与えられた参与者（TR）を表す格」であるといった超スキーマにより一つのカテゴリとしての連帯を保っている。

このような結論は日本語教育にも応用が可能であると思われる。杉村（2002）では格助詞ニ、カラ、へ、マデ、デ、トの6つの格助詞について、それらの格助詞が共有するスキーマを提示し、「この方法によれば、学習者は格助詞の多様な意味役割を意味的ネットワークで理解できるため、機械的な暗記に比べて記憶に負担がかからなくてすむという利点がある。」（p.39）と、日本語教育へ応用することの意義を主張している。杉村（2002）では格助詞ガは対象に含まれていないものの、ガについてもスキーマの提示はガの意味用法の習得を促進することが期待できる。即ち日本語のガ格には様々な用法を持ち合わせているが、本稿で見たような共通のスキーマやプロトタイプの用法との関連を示してあげることにより、学習者は比較的容易に習得ができるようになると思われる。

最後に主格に関して日本語と英語とを対照してみる。池上（1981）によれば、英語はいわゆる「スル型言語」で、事態を参与者とそれらの関係として、プロセス的に把握し表現する傾向が強いが、日本語は「ナル型言語」で、事態をその場に生起するものとして非プロセス的、存在論的に表現する傾向がある。事態をプロセス的に把握すると、事態は〈動作〉→〈変化〉→〈結果状態〉としてとらえられる（影山 2001）。〈動作〉、〈変化〉、〈結果状態〉は、図12では大まかに各々「プロセス的主体」、「プロセス的対象」、「非プロセス的主体」に該当する。したがって英語では「非プロセス的対象」の用法がほとんど存在しない。また〈結果状態〉に相当するとした「非プロセス的主体」用法は、英語では「プロセス的把握」がなされ、動力連鎖の最終局面がプロファイルされたものとなるので、厳密には「プロセス的対象」の用法の一部となる。つまり英語では「非プロセス的」把握の典型ともいえる「非プロセス的主体」用法ですら、あくまでも「プロセス的把握」の延長線上でとらえられているのである。英語が「スル型言語」だと言われるゆえんである。

一方日本語では、「プロセス的把握」とともに、「非プロセス的、存在論的把握」も多く、よりプロセス的な事態には前者が用いられるが、非プロセス的、存在論的な事態は後者で表現することになる。その結果「プロセス的把握」の最も拡張的な「経験対象」用法は「非プロセス的把握」との境界部に位置し、プロセス的表現も、非プロセス的表現も可能になっている（図11参照）。図12のU字の矢印はそのこと（両把握の周辺の用法で、両表現が可能なこと）を示している。また「非プロセス的、存在論的把握」は、「プロセス的把握」の領域にまで影響を及ぼす（その典型的な例が(2-f)のように、「非プロセス的、存在論的把握」に近い一部の「動作対象」用法である）。それが日本語をしてプロセスの自動詞的（ナル的）表現を多くし、「ナル的言語」としての性格を持たしめていると思われるのである。この主格に関する日英対照研究については紙面の都合で詳述することができないので稿をかえて論ずることにしたい。

〈参考文献〉

- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and form*. London: Longman.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』、大修館書店。
- 影山太郎編 (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』、大修館書店。
- 河上誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』、研究社出版。
- Langacker, Ronald. W. (1991 a) *Foundations of cognitive grammar*. Vol.2. Stanford University Press.
- Langacker, Ronald. W. (1991 b) *Concept, image, and symbol. The Cognitive Bases of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruiter.
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』、くろしお出版。
- 森山新 (2004 a) 「認知主体の把握のしかたと格助詞ニの多義構造」『韓国日本学会第 68 回学術大会 Proceedings』、韓国日本学会。
- 森山新 (2004 b) 「格助詞ニの意味構造についての認知言語学的考察」(準備中)
- 菅井三実 (2002) 「構文スキーマによる格助詞「が」の分析と基本文型の放射状範疇化」『世界の日本語教育』12: 175-191.
- 杉村泰 (2002) 「イメージで教える日本語の格助詞」『言語文化研究叢書』1、名大言語文化部・国際言語文化研究科、39-55.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』、くろしお出版。

〈注〉

- 1 本稿では、プロセス的主体であるか、対象であるかが重要な概念となっているため、混乱を避けるため、「動作主」、「被動作主」の代わりに「動作主体」、「動作対象」と表現する。
- 2 益岡 (2000) では、ガの用法を「補足語用法」と「非補足語用法」とに分けているが、本稿では主に前者を扱うことになる。
- 3 認知言語学の立場から格助詞ガを研究した先行研究には、Langacker (1991 a, 1991 b) のほか、菅井 (2002) があるが、本稿と意見を異にする部分も多い。本稿において菅井 (2002) を踏襲している部分については、その旨を記述した。
- 4 Langacker の認知文法の用語で、語の意味を得る際に、その前提として概念化されるもので、プロファイルされた部分に対して背景となる。例えば「斜辺」をプロファイルさせる時のベースは「三角形」である。
- 5 Langacker の認知文法における用語で、認知主体が語の意味を得る際に構造の一部に注目し焦点化させることである。
- 6 但し最も際立っているモノ (TR) が参与者である場合に限る。
- 7 格助詞ニの①移動の着点、②移動の起点、③存在の位置関係、④経験の主体の用法は、そのプロセス性を中心に考えると、それぞれ①プロセスの対象、②プロセス的主体、③非プロセスの対象、④非プロセス的主体の用法と考えることができる。またガ格とニ格とは互いに対峙する関係を持っているため、このような設定を試みた。
- 8 菅井 (2002) では格助詞ガの意味構造の分析にあたって、「過程的構文」と「存在論的構文」という 2 つの構文スキーマの存在を仮定していることはすでに述べたが、これらは本稿で述べる「プロセス的把

握]、「非プロセス的、存在論的把握」という人間の2通りの把握の仕方が言語化に反映したものであると考えることができる。

- 9 非能格動詞、非対格動詞については、影山編（2001）を参照。
- 10 但し「経験対象」は他動的な「動作」として経験をとらえた場合に限られるため、それらは他動詞の受動文で表されたものとなる。(9)のような自動詞で表された「経験対象」は、日本語の場合「動作」といったプロセス的把握ではなく、非プロセス的、存在論的事態としてとらえられるため、「非プロセス的対象」用法に属する（3.4節参照）。
- 11 影山編（2001）の「反使役化」された自動詞文がこれにあたる。但し（16b）のような中間構文は、日本語の場合その取り扱いが容易ではない。本稿では「プロセス的対象」がガ格で表されることから、「プロセス的対象」用法としたが、これは動作主体が不特定な人へと一般化した受動的可能表現の場合に限られ、寺村（1982）が「自発態」と呼んだ自発性の高いものは、むしろ「プロセス的主体」用法に近く、また動作主体が個別化した「可能態」の場合には、以下で扱う「非プロセス的対象」の「経験対象」用法に属する。
- 12 但し日本語のようないわゆる「ナル型の言語」（池上 1981）の場合、動作主体が存在しながらそれをあからさまに表現しない傾向もあり、その点が使用や習得などに影響を及ぼし、必ずしも使用や習得が「プロトタイプからその拡張へ」と進まない可能性がある。
- 13 「非プロセス的主体」の用法は、動作や変化の結果としての「結果状態」との関連で「対象」として扱われる場合もある。しかし本稿では「結果の状態」は何らかの動作や変化が前提として存在するため「対象」として扱うが、「存在」はそのような前提が存在しないので「主体」と考え、「非プロセス的主体」としている。
- 「非プロセス的主体」の用法は、同じ非プロセス的、存在論的把握の用法である「非プロセス的対象」とともに、「存在論的構文の範疇化」として菅井（2002）に詳細な分析があるが、本稿ではこれを参考にしつつも、カテゴリー化の仕方にかかなりの違いが見られることから、独自の観点を加えて分析を行っている。
- また益岡（2000）ではガの用法を「補足語用法」と「非補足語用法」とに分けていることは前述したが、後者の用法の「属性主」「経験者」は、本節で述べられている「補足語用法」としての「非プロセス的主体」の用法が、「非補足語用法」へと拡張したものと考えられる。「属性主」「経験者」の用法とは以下のようなものをさす（下線部）。
- ・属性主用法：太郎が父がたくさん酒を飲む（こと）
 - ・経験者用法：鈴木さんが娘が無事大学に合格した（こと）
- 14 益岡（2000：236-237）では、(3-a)のような用法を「物理的位置」、(4-b)～(4-d)のような用法を「抽象的位置」としている。また後者が前者からの拡張的用法であることは、菅井（2002）でも指摘している。
- 15 菅井（2002）でもガに「主体」としての用法と「対象」としての用法があることを指摘しているが、本稿の「主体」「対象」とはやや意味を異にしている。